

論文

「ガラスが割れた」の指導案：能格構文と受動態

中 川 直 志

1. はじめに

本稿においては、日本人学習者による「ガラスが割れた」の英訳にみられる傾向を足掛かりに、能格構文と受動態の指導のあり方について考察する。筆者は毎年、学生に「ガラスが割れた」を英訳させているが、大半の答えが (1a) であり、(1b) はまれである。

- (1) a. The glass was broken.
- b. The glass broke.

一般に言う「進学校レベル」の高校生にも同じテストを行ってみたが、20 余名の生徒の内 (1b) で訳したのは 1 名のみであり、英訳自体の間違い等を除いた大半は (1a) で訳している。

ところが、数こそ少ないものの、英語母語話者やそれに近い帰国子女に同じテストを行うと、日本語の意味を「割れた」という出来事の意味で解釈する限りにおいて、(1b) で訳すことの方が多い。これに関して興味深いのは「ガラスが割れた」に対する Google 翻訳の英訳 ((2)) である。

- (2) Glass broke

(2) は、glass の解釈が定か不定かという点を除いて、(1b) と同じである。それでは "The glass was broken." が Google 翻訳でどのように和訳されているかと言えば、(3) のようになる。

- (3) ガラスが壊れていた。

さらに、"The glass broke." を Google 翻訳で和訳すると (4) のようになる。

- (4) ガラスが壊れた。

Google 翻訳の信頼性には否定的意見も少なくないが、(2-3) に示した訳は筆者のインフォーマントの直観と合致する。筆者のインフォーマントは能動態が用いられた "The glass broke." は「割れた」という出来事を意味し、受動態が用いられた "The glass was broken." は「割れていた」という状態を意味する、と解釈しており、これは「ガラスが割れた」の英訳を (2) とする Google 翻訳の判断と同じである。

2 節で述べるように、受動態には本来出来事の意味もあるので、日本人学習者の英訳において (1a) が大半を占めることを全否定することはできないであろうし、構文暗記の徹底という意味では英語教育の成果とみることもできよう。しかし、少なくとも運用レベルにおいて、母語話者の直観とは少々ずれたところがあるのも事実であり、(1b)の可能性もあることや (1a, b) の違いが真に理解されていることが望ましい。そこで本稿においては、(1a) の受動文と「能格構文」と呼ばれる (1b) タイプの構文の、構文としての基本的意味を観察した上で、両者が適切に区別されるためにどのような指導が行われなければならないか考察する。

本稿の構成は次の通りである。2 節においては、受動態に 2 通りの意味があることを受動態の歴史的発達に照らして観察し、(1a, b) の違いに動作主性の認知が関与している可能性を示唆する。3 節においては、能格構文が統語的にどのように分析されているか概観した上で、能格構文における動作主性について考察する。4 節においては、それまでの分析を踏まえて、両構文がどのように指導されるべきか考察し、特に受動文の語用論的特性が丁寧に指導されるべきであることを指摘する。5 節は結論である。

2. 受動態の2つの意味

本節においては、保坂（2014：119-128）にしたがい、受動態が「出来事」と「状態」という2通りの意味を持つことを歴史的視点から観察する。保坂（2014：119-120）によると、古英語（OE）においては3種類の受動態が存在した。

(5) a. 屈折受動態

[illegible]

b. beon 受動態

ne bið þær nænig ealo gebrowen mid
nor is there not any ale brewed among
Estum, ac þær bið medo genoh
Estonians but there is mead enough (Or 1 1.17.5)
(エストニア人の間ではビールは醸造されていないが、ハチミツ酒は豊富にある)

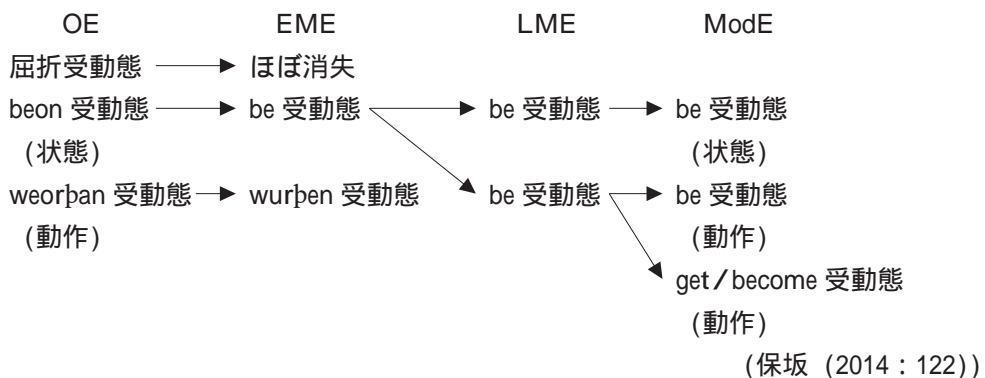
c. weortan 受動態

ðone þtytt ðe he on aworpen wearð
the abyss that he into cast was (CP 17.112.2)
(彼が投げ入れられた奈落の底) (保坂 (2014 : 119-120))

(5a) は屈折受動態と呼ばれるもので、ゲルマン語の時代に動詞の屈折変化だけで受動態を表すことができた名残であるが、初期中英語 (EME) の時代にはほぼ消失した。注目すべきは (5b, c) である。(5b) は beon/wesan (= be) 受動態と呼ばれ、現代英語の be + 過去分詞の受動態の起源である。これに対し、(5c) は weorþan (= become) 受動態と呼ばれ、beon 受動態が主に状態 (The door was closed. = 「ドアが閉められていた」) を表すのに対し、weorþan 受動態は動作、つまり出来事の意味 (The door was closed. = 「ドアが閉められた」) を受け持つことが多かったと言う。つまり、現代英語の受動態の直接的な起源は beon 受動態となるが、その際、状态的な意味での用法が主であったということである。さらに保坂 (2014 : 121) は、OE の be + 過去分詞が、「~された状態で存在した」という意味を表し、be 動詞が存在を表す本動詞としての機能を保持していた可能性がある」と指摘している。

その後、weorþan 受動態は、初期中英語まで wurþen + pp として動作受動を意味する機能を保持したが、12 世紀前半には消滅した。それ以降 be 受動態が状態と動作の受動の意味を受け持っていたが、近代英語に入り、get/become 受動態が動作の受動を明示する構造として確立した。ただし、be 受動態の動作受動の意味も消失することなく、動作受動としては be 受動態と get/become 受動態が共存しながら現代に至っている。この歴史的変遷を図示したのが (6) である。

(6) 受動態の発達



以上を踏まえると、受動構文に 2通りの意味があることも、前節で観察した、母語話者が受動文を状態の意味で解釈する傾向も自然に理解できる。指導という観点から注目したいのは get/become 受動態である。このタイプの受動態は、教育現場においてあたかも特殊構文のように扱われることが多いが、(6) に示したように、歴史的役割を担っ

ており、get/become の根本的意味 ((状態) 変化) と get/become 受動態の意味 (動作) が明確に結び付けられるような指導が望ましい。それが be 受動態の解釈のより精緻な理解に結び付くと考えられるからである。

その一方で、(1a, b) のいずれも出来事で解釈できるのであるから、(1a) より (1b) が優先される事実を出来事と状態の違いだけに還元することは容易でない。この問題を解決するにあたって重要なのは、両構文において、動作主の存在がどのように認知されているかということである。受動文においては、動作主が by 句で具現されることもあることから、by 句が具現していない場合でも潜在的な動作主の存在を仮定することができるが、能格構文で動作主が by 句で現れることはない。

(7) *The glass broke by John.

ここで重要になるのは、能格構文と受動文の知的意味が同じであることを保障しつつ、動作主性における相違をいかに説明できるかということである。そこで、次節においては、能格構文の統語分析を概観した上で、能格構文における動作主の存在について考察する。

3. 能格構文と動作主性

能格構文に対する統語理論的関心は、まず、受動文との平行性をいかに保障するかということにある。そこで本節においては、能格構文に対する代表的統語分析である非対格分析について概観し、その中で動作主がどのような扱いを受けるのか考察する。そのうえで、意味構造の観点から能格構文における動作主性について考察する。

3.1. 非対格分析

3.1.1. 能格構文と非対格分析

学校文法において能格構文あるいは能格動詞という用語が使用されることはなく、(8a) のような「非能格動詞」や (8b) のような「非対格動詞」もあわせ、「自動詞」と分類される (広義では能格動詞を非対格動詞に含めることがある。)

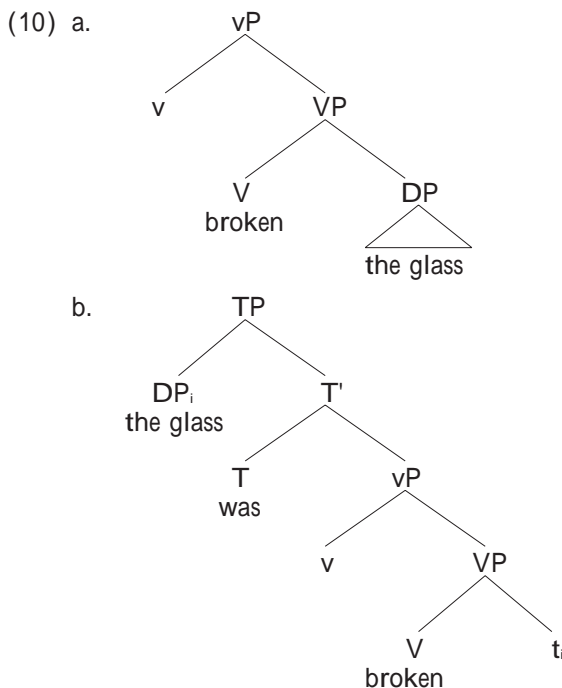
- (8) a. 非能格動詞：意図的な行為や生理的な活動を表す動詞
work, speak, talk, smile, cry, laugh, dance, shout, cough, sneeze, sleep, etc.
- b. 非対格動詞：存在や出現を表す動詞
appear, arise, arrive, exist, occur, die, disappear, remain, etc.
- c. 能格動詞：状態変化を表す動詞
rise, fall, drop, sink, roll, flow, open, shut, close, break, etc.
(cf. Perlmutter and Postal (1984 : 98-99), 影山 (1996 : 20-21), 影山 (2001 :

16-17, 寺田 (2013 : 63))

しかし、能格構文とそれ以外の自動詞文の間には、使役交替と呼ばれる他動詞文との交替可能性において違いが見られる。能格動詞においては、他の自動詞では不可能な、他動詞文が可能である。

- (9) a. The glass broke.
b. John broke the glass.

使役交替は、動作の対象 (the glass) が主語位置にあるか目的語位置にあるかという意味で能動態と受動態の交替と平行的である。そのため、生成文法では、受動文の派生とほぼ同様の、(10a) から (10b) にいたるような派生が広く支持されている。これが非対格分析である。



派生を駆動する細かなシステムの説明は省くが、(10) において重要なのは (10a) の基底構造において動詞の目的語位置にあった DP (the glass) が表層構造 ((10b)) において主語位置へ移動しているということである。一般に受動文の派生においても同様の移動が仮定されており、このような移動は、文中における要素と構造上の位置に一貫した関係を要求する 役付与均一性仮説 (uniformity of theta assignment hypothesis) (cf. Baker (1988 : 46)) に照らしてもおよそ妥当なものであると言えよう。(11) で言及さ

れている 役とは文中の要素の主題関係における役割、つまり、動作主や対象といった役割のことである。

(11) 役付与均一性仮説

述語に関して同じ 機能を果たす項は、統語部門において同じ位置に生成される。

(寺田 (2013 : 64))

非対格分析には経験的証拠も多く提示されてきている。次節ではこれらについて概観する。

3.1.2. 非対格分析の証拠

3.1.2.1. 同族目的語

同族目的語とは、動詞と形態的に結び付いた目的語であり、sing a song、dance a dance、dream a dream などが知られている。寺田 (2013 : 64) によると、(12) のように非能格動詞は同族目的語を取ることができるが、(13) のように能格動詞は同族目的語を取ることができない。

(12) a. Louisa slept a restful sleep.

b. Malinda smiled her most enigmatic smile.

(Levin and Rappaport Hovav (1995 : 40))

(13) a. *The glass broke a crooked break.

b. *The actress fainted a feigned faint.

(ibid.)

3.1.2.2. way 構文

way 構文とは、make one's way (苦労して進む) のような、他動詞と one's way を含む表現である。寺田 (2013 : 64) によると、非能格動詞は way 構文で用いることができる。

(14) a. ...three dozen hare Krishnas danced and sang their way through Gorky Park on Sunday ... [AP Newswire 1990, 29138379]

b. ... corporate executives wine, dined and golfed their way to a record 4.98 trillion yen or about \$36.5 billion ... [AP Newswire 1990, 45776417] (ibid.: 137)

これに対して、能格動詞は way 構文に現れることができない。

(15) a. *The apples fell their way into the crates.

b. *The oil rose its way to the top.

c. *She arrived her way to the front of the line. (ibid.)

3.1.2.3. 結果構文

結果構文とは、動詞が表す出来事が引き起こす結果を副詞句などで表す構文である。

(16) The glass broke to pieces. (畠山 (2004 : 106))

(16) は「ガラスが粉々に割れた」という意味であり、「粉々に」が結果を表している。
(16) に示すように、能格動詞は結果構文との共起が可能であるが、非能格動詞は結果構文と共起できない。

(17) *Naoko talked hoarse. (ibid.: 105)

畠山 (2004 : 105) によれば、(17) を「話をした結果 Naoko の喉がカラカラになった」とは解釈できない。

結果構文の容認可能性は、結果状態の主体が主語なのか目的語なのかに依存するという点で、非対格分析に対するより直接的な証拠となる。他動詞構文においても、結果構文が表す状態の主体は主語ではなく目的語でなければならない。

(18) a. Taro broke the glass to pieces.
b. Naoko painted the bench red. (ibid.: 108)

(19) a. *Taro broke the glass refreshed.
b. *Naoko painted the bench exhausted. (ibid.: 109)

ちなみに、(18) と (19) に対応する日本文でも同様の結果が得られる。

(20) a. 太郎がガラスを粉々に割った。
b. 直子がベンチを赤く塗った。 (ibid.: 107)

(21) a. *太郎がガラスをスッキリ割った。
b. *直子がベンチをクタクタに塗った。 (ibid.: 108)

(18) と (20) では結果状態の主体が目的語であり文法的となっているが、(19) と (21) では結果状態の主体が主語であり非文法的となっている。(16) に示した能格構文の文法性は、能格構文の主語が基底構造から主語位置にあるとするかぎり、(18-20) の文法性と一致しない。しかし、能格構文の主語が、(10a) に示したように、目的語位置に基底生成されているとすれば、目的語位置にあった DP が結果状態の主体となれるので、(18-20) と一貫した説明が可能となる。

3.1.2.4. 名詞修飾用法

過去分詞が名詞を修飾することは、能格動詞では可能である ((22)) が、非能格動詞では不可能である ((23))。

- (22) a. fallen leaves
b. a rotten egg
c. wilted lettuce (畠山 (2004 : 111))
- (23) a. *worked Taro
b. *talked Naoko
c. *swum Hana-chan (ibid.: 112)

(22) は (24) のような能格構文が元となっており、(23) は (25) のような非能格構文が元となっている。

- (24) a. Leaves fell. (葉が落ちた)
b. An egg rotted. (卵が腐った)
c. Lettuce wilted. (レタスがしなしなになった) (ibid.: 111)
- (25) a. Taro worked.
b. Naoko talked.
c. Hana-chan swam (ibid.: 112)

結果構文と同様に、名詞を修飾する過去分詞は主語を修飾することはできないが、目的語を修飾することはできる。(26) の他動詞から目的語を修飾する過去分詞は容認可能 ((27)) であるが、主語を修飾する過去分詞は容認不可能 ((28)) である。

- (26) a. Tom baked cookies.
b. Naoko painted the bench.
c. Taro polished the glass. (ibid.: 113)
- (27) a. baked cookies
b. the painted bench
c. the polished glass (ibid.: 111)
- (28) a. *baked Tom
b. *painted Naoko
c. *polished Taro (ibid.: 113)

(26-28) に対する分析を (22) にも適用するためには非対格分析が前提となる。

3.1.2.5. 名詞化構文における格表示

影山（1996：22-24）によると、名詞化構文における項がどの前置詞によって導かれるかは基体となる動詞のタイプによって異なる。（影山（1996：22-24）は非対格動詞と能格動詞を一括して非対格動詞としているが、(29) では両動詞を区別している。）

(29) a. 他動詞

the destruction of the ancient city by the Vandals

b. 非能格動詞

dreaming by children

swimming by individuals with heart trouble

meditation by experienced monks

smiling by movie stars

c. 非対格動詞

the existence of / *by demons

d. 能格動詞

sinking of / *by the ship

dripping of / *by the faucet

rise of / *by the price of steak

(cf. Johnson & Postal (1980 : 379) ; Williams (1987))

非能格動詞や他動詞の主語は動作主であり、名詞化を受けると前置詞 by を伴って具現する。

これに対し、他動詞の目的語や非対格動詞の主語、そして能格動詞の主語は動作主ではなく、名詞化を受けると前置詞 of を伴って具現する。非対格動詞や能格動詞における主語が最初から主語位置にあるのではなく、基底構造では目的語位置にあると考えれば、「目的語位置にあった項は名詞化によって of 句として具現する」といった一貫した分析が可能となる。影山（1996：29-31）は擬似受動文の派生においても、非能格動詞の主語が by 句として具現可能であるのに対し、非対格動詞や能格動詞では不可能であることを示している。

3.1.2.6. 依頼使役文

依頼使役文とは、have の目的語が指示する人物などに頼んで何らかの動作をしてもらうという意味を持つ使役文である。(30) に示すように、非能格動詞や他動詞を含む依頼使役文は容認されるが、(31) に示すように、能格動詞のような動作主主語を取らない動詞を含む依頼使役文は容認されない。

(30) a. Barbara had George go shopping.

- b. Brian had Mila write the French exam. (影山 (1996 : 31))
- (31) a. *Ralph had Sheila fall down.
b. *The strong winds had the books fall.
c. *The warm sunshine had the plants grow. (ibid.: 32)

(30) と (31) の相違も、「依頼使役文における have の目的語は基底構造から主語位置になければならない」と仮定することによって説明でき、能格構文に対する非対格分析を支持する。

3.1.3. 非対格分析と動作主

前節に示したように、非対格分析には経験的証拠が多数挙げられており、理論的にも受動構文との平行性を捉えられるという利点がある。その基本的な考え方は (32) のように表すことができよう。

(32) 他動詞から自動詞への派生

他動詞 break : x が行為 y が変化 y が壊れた状態
 x が行為 の部分を削除すると
自動詞 break : y が変化 y が壊れた状態

(影山 (2001 : 21))

(32) は能格構文に動作主が存在しないということを示唆しており、これは 1 節で述べた日本人学習者の傾向と一致すると考えられる。つまり、「ガラスが割れた」に動作主がない以上、ガラスは割られるしかない。したがって「ガラスが割れた」の英訳に受動文が用いられることになる。

しかし、これは母語話者の直観と同じではない。「ガラスが割れた」に能格構文を対応させる母語話者の直観はいかなるものなのであろうか。ここで注目すべきは影山 (2001 : 22ff.) の分析である。影山 (2001 : 22ff.) は能格構文に動作主が存在しないという仮説に疑問を呈し、能格構文における動作主の現れ方について分析している。次節においてはこの分析を概観する。

3.2. 意味構造と動作主

能格構文に動作主が存在しないという仮説に対する証拠としては、(7) ((33) として再掲) にも挙げたように、能格構文において動作主が by 句で具現できないことが挙げられる。

- (33) *The glass broke by John.

しかし、影山 (2001 : 22) は「受動文が統語構造で作られるのに対して、動詞の使役交

替は語彙の問題であるから、by 句が見つからないというだけでは、自動詞の意味構造において動作主が存在しないという結論は必ずしも導けない」と主張する。そして、「能格動詞の意味構造は単に「主語が変化する（変化 結果状態）」という自然発生的な出来事としてではなく、「主語名詞の内的な性質ないし内的活動が誘因となって変化が起こる」という自発的な変化としてとらえることができる」と分析する。つまり、ガラスはそれ自体の「割れうる」という特性によって自発的に割れていると考えるのである。

このことは、What X did was... という構文で確かめることができるという。この構文は、通常、動作主の活動について記述する（cf. Jackendoff (1990)）ので、他動詞や非能格動詞はこの構文と共起できる。

- (34) a. What he did was (to) break the vase.
b. What he did was (to) cry. (影山 (2001 : 25))

その一方で、動作主を含まない非対格動詞はこの構文と共起できない。

- (35) a. *What the big earthquake did was (to) occur.
b. *What the old notebooks did was (to) yellow. (ibid.: 25-26)

興味深いことに、能格動詞はこの構文と共起できる。

- (36) a. What the door did was (to) open.
b. What the vase did was (to) break. (ibid.: 26)

(36) は、The door opened. や The vase broke. といった能格構文において、ドアや花瓶が「開けられ」たり「割られ」たりするのではなく、自発的に「開く」や「割れる」といった事態を招いていることを示している。

以上を踏まえ、影山 (2001 : 29) は能格動詞の意味構造を (37) のように分析している。

- (37) 能格動詞
x が活動 y が変化 y の状態
x と y が異なる場合は、他動詞 (X broke Y.) になる。
x と y が同じ物と見なされると、自動詞 (Y broke.) になる。 (ibid.: 29)

によって派生されるのが能格構文であり、このような派生を影山 (2001 : 29) は反使役化と呼んでいる。

3 節での議論を総合すると、能格構文においては、統語的に動作主は存在しない（し

たがって、動作主が by 句として具現することはない) が、意味的には動作主が存在するということになる。この分析は 1 節で言及した母語話者の直観と合致する。つまり、「ガラスが割れた」において動作主は存在するものの、必ずしも「割られた」のではない以上、特に「外的動作主によって割られた」ことに言及する必要がない限り、受動文を用いる理由がないと分析できる。

4. 受動文と与格構文の使い分けとその指導

2 節と 3 節で受動文と能格構文の構文としての意味を確認したところで、両者を適切に使い分ける指導について改めて考えたい。認識させたいのは次の 2 点である。

- (38) a. 受動文に状態と出来事の意味があること
- b. 受動文には外的動作主（外的使役者）があり、与格構文には内的動作主（内的使役者）があること

受動文に状態と出来事の 2 通りの意味があることは解釈から理解できるが、その一方で、能格構文における非対格性や動作主性を理解させるのは容易でない。ただし、英語運用の指導という観点からは、両構文を区別して使えさえすればよいので、その限りにおいて、動作主性や非対格性に深入りせずともよいのではないと思われる。

それでは、どのような指導が考えられるのか。前節において、「割られたことに言及する必要がない限り、受動文を用いる理由がない」と述べた通り、受動文は、基本的に「主語位置に移動した目的語が動作を受ける」ことを表す構文である。この説明自体は決して難しいものではないが、問題はこのような理解が文脈に対する過剰な、あるいは優先的な解釈になって能格構文の使用を抑制していることにある。つまり、「割れる」という事象自体に対する「割られる」という認識が大きすぎ、「割れる」ことと「割られる」ことの区別が英語運用レベルでつけられていないのである。

したがって、受動文の指導にあたってはその解釈だけでなく、受動文がどのような文脈で用いられるのか説明されることが望ましい。そこで本節においては、島 (2002 : 55-56) に基づき、受動文の機能的特徴を概観する。そのうえで、受動文が用いられる文脈が受動文の構文としての意味とどのように合致するのか分析し、能格構文との適切な使い分けを実現する方策について考察する。

4.1. 受動文の機能

島 (2002 : 55-56) は、Jespersen (1933 : 120-121) にしたがって、受動文が使われる主な理由として次の 5 つの場合をあげている。

第 1 に、能動文の主語が不明であるか、容易に言及できない場合に受動文が用いられる。例えば、(39a) では誰が彼女の父親を殺したのかが不明であり、(39b) では誰が水

を供給しているのか特定できない。

- (39) a. Her father was killed in the Boer war.
b. The city is well supplied with water.
c. I was tempted to go on.
d. The murderer was caught yesterday, and it is believed that he will be hanged.
e. She came to the Derby not only to see, but just as much as to be seen.

(島 (2002 : 55))

第 2 に、文脈から能動文の主語が明らかな場合にも受動文が用いられる。(40a) ではリーズ州の州民が投票したことが明確であるため主語が州民ではなく当選者となっている。

- (40) a. He was elected Member of Parliament for Leeds.
b. She told me that her master had dismissed her. No reason had been assigned; no objection had been made to her conduct. She had been forbidden to appeal to her mistress, etc.

(ibid.: 56)

第 3 に、能動文の主語を示したくない特別な理由が存在する場合も考えられる。特に、書き言葉における 1 人称は、しばしば省略される傾向がある。(41) は論文などで見られる英文と考えられ、受動文にすることで主観性を消し、客観性を帯びることが可能になる。

- (41) Enough has been said here of a subject which will be treated more fully in a subsequent chapter.

(ibid.: 56)

第 4 に、能動文の主語よりも、受動文の主語の方により関心がある場合が挙げられる。(42a) では雷が落ちたという事実よりも家が落雷の被害を受けたということに関心を付けている。(42b) では自動車が轢いたという事実ではなく自分の息子が轢かれたことを強調している。

- (42) a. The house was struck by lightning.
b. His son was run over by a motorcar.

(ibid.: 56)

第 5 に、文と文のつながりをよくする場合がある。(43) では主語を he に統一することによって文が述べられる視点に一貫性が生まれる。そのため and に続く述部が受動化されている。

- (43) He rose to speak, and was listened to with enthusiasm by the great crowd present.
(ibid.: 56)

この用例は、英文構成上の原則の 1 つである「旧情報から新情報へ」という原則、つまり、話者と聞き手の双方が了解している旧情報を文の主語として、それに新たな情報を加えるというルールにしたがっている。(44a) において、第 2 文の *it* は旧情報で *Mary* は新情報である。第 1 文で新情報として現れた *this book* が、その直後の第 2 文で *it* として主語位置に現れることにより、第 2 文でも旧情報から新情報への流れが生まれる。

- (44) a. Just look at this book. It was talked about by Mary yesterday.
b. Just then John came in. He was accompanied by his father. (ibid.: 56)

(44b) においても、旧情報から新情報への流れに合うように、2 つ目の文が受動文になっている。

4.2. 受動文の語用論的意味を考えさせる指導

前節で列挙した受動文の機能から、受動文が用いられる文脈は相応に特殊であると考えられる。それらを理解することによって、受動文よりも能格構文の方がふさわしい文脈が少なくないことも認識できるであろう。ただし、それらを一つ一つ覚えていくことも有為であるが、運用レベルの指導ではより簡潔な理解が期待される。そこで考えさせたいのは、「なぜ目的語（被動者、対象）であったものが主語になるのか」ということである。前節で概観した機能において興味深いのは、それらが受身の意味そのものが必要とされる文脈というよりも、目的語を主語位置に置かざるを得ない文脈ばかりであるということである。つまり、受動態は「目的語（被動者、対象）の視点で述べるのが望ましい文脈がある場合に、その方策として目的語を主語位置に移す装置」と考えられる。そして、もう一つ重要なことは「目的語あるいは被動者の視点で述べる必要がない限り、動作主を主語とする能動文（能格構文）が自然である」ということである。能格構文の主語は、統語的には目的語であったかもしれないが、あくまでも（内的）動作主であって、当該の出来事を引き起こす潜在的能力を有していれば、特に被動者としての視点を強調するのではない限り、能格構文がデフォルトの解釈であるといえる。このことは次のような例によっても支持されよう。

- (45) a. The storm broke the window.
The window broke.
b. He broke {his promise/the world record/the contract}.
*{His promise/The world record/The contract} broke.

(Levin and Rappaport Hovav (1995 : 105) ; 影山 (2001 : 27))

(45) は能格動詞の目的語になり得る要素であっても、当該の出来事を引き起こす潜在的能力を持たなければ能格構文の主語になれないことを示している。(45a) に示すように、ガラスには割れるという潜在的特性があるので能格構文で用いることができるが、(45b) に示すように、約束や世界記録や契約にはそのような潜在的特性がないので、能格構文で用いることができない。潜在的能力があると判断するかどうかは母語話者の直観に頼るほかないので、どの動詞が能格構文に現れ得るかは究極的には個別に覚えて行く他ないが、能格構文に現れることができれば、つまり、自動詞用法のある他動詞であれば、特に外的要因によって事態が引き起こされていることを示唆する必要がない限り、能格構文が使用されることが自然であることを説明したい。そして、受動構文においては、「被動者の視点で動詞の表す事態が外的要因によって引き起こされている」ことを強調したい。このような考え方は、実用英文法書として広く用いられている Murphy (2009 : 80) の記述にも反映されていると言えよう。

- (46) a. When we use an active verb, we say what the subject does
b. When we use a passive verb, we say what happens to the subject
(Murphy (2009 : 80))

(46b) において、受動文は「主語に何かが起こった」ことを表す構文であると説明されている。「何かが起こる」ということは、通常、外的要因によって何かが引き起こされることを意味している。

5. 結語

本稿においては、「ガラスが割れた」の英訳に見られる日本人話者の傾向を足掛かりに、受動文と能格構文の使い分けを促進する指導について考察した。日本人学習者には能格構文が使用可能である場合であっても受動文を優先させる傾向があり、これには受動文と能格構文が構文として持つ意味の理解が深まっていないことが原因として挙げられる。受動文の2通りの意味と、受動文と能格構文における動作主性について理解することによってこの問題はある程度克服されると思われるが、学習英文法レベルではまず、受動文が相応に特殊な文脈で用いられるということと、受動文における外的要因（外的使役性）の存在について理解させることが重要であろうと考えられる。そのために、「なぜ被動者が主語位置に現れるのか」という問いは避けて通れない。それは、究極的には、主述関係とは何かという問いにも繋がるであろう。文とは主語について叙述するものであり、通常は叙述対象とならない被動者が主語になることが、文の構造や形態にどのような影響をもたらすのかを「考えさせる」授業を期待したい。

参考文献

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 - 言語と認知の接点』, くろしお出版.
- 影山太郎編 (2001) 『日英対象 動詞の意味と構文』, 大修館書店, 12-39.
- 島越郎 (2002) 「名詞句移動」, 中村捷・金子義明 (編) 『英語の主要構文』, 研究社, 東京, 51-60.
- 田中智之・寺田寛 (2004) 『英語の構文 英語学入門講座・第 9 巻』, 英潮社, 182-185.
- 寺田寛 (2013) 「A 移動」, 田中智之 (編) 『統語論』 (朝倉日英対照言語学シリーズ第 5 巻), 朝倉書店, 東京, 56-79.
- 畠山雄二 (2004) 『情報科学のための理論言語学入門』, 丸善株式会社, 101-119.
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』, 開拓社, 東京, 119-128.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic structures*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jespersen, Otto. (1933) *Essentials of English Grammar*, George Allen and Unwin, London.
- Johnson, David and Paul M. Postal (1980) *Arc Pair Grammar*, Princeton University Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the syntax - lexical semantics interface*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Murphy, Raymond (2009) *Grammar in Use: Intermediate*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Perlmutter, David and Paul Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusiveness Law," In David Perlmutter and Carol Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar 2*, University of Chicago Press, Chicago, 81-125.
- Williams, Edwin (1987) "English as an Ergative Language: The Theta Structure of Derived Nouns," *CLS 23, Part One* : 365-75, Chicago Linguistics Society.